



「ワークキャンプを終えて」

間近にせまるキリマンジャロ山。子供たちのはしゃぐ声。村人の屈託のない笑顔。。

東京に帰って、早一ヶ月が経ち、ビルの谷間と通勤ラッシュにのまれながら過ごす日々の中で、ビルに刻まれた狭い空を見上げては、タンザニアの広大な空を思い出します。

ワークキャンプで教えられたことというのは、些細なことから、これからの私の人生に大きく影響しそうなこと、村人に教えられたことから、メンバーの方に教えられたこと、本当にいろいろありました。「参加できてよかった!」、この一言に尽きます。

通勤の電車の中でふと思ったこと。東京という都市に住んでいると、みんなきれいな装いで、土汚れ一つつかないような生活が当たり前。けれども、タンザニアでの生活を思い返せば、常に爪のなかに黒いドロが食い込んでたり、洋服には土汚れがついていたり、同じ服を続けて着たり、ということに慣れ始めていた。

東京で、土汚れの服のままウロウロしていたら、周りに「えっ?」という目で見られてしまいそうだけれど、本来、人間のあり方を考えれば、むしろ、土汚れ一つつかないのが当たり前、なんてほうが、よっぽど不自然だなあ。。。

人間は、土を耕し、どろにまみれないと、本来生きていけない生き物なんですよ。都市生活を全否定するつもりはないですが、やはり、人間は土の上にこそ生き得るということ、アスファルトの上の上の生活の中でも忘れたくないな、と思っています。

植林作業では、月並みな表現ですが、自然の力の圧倒的な大きさというのを肌で感じました。

背丈ほどに繁茂した、トゲのある頑丈なブッシュと格闘し、やっとの思いで整地したところで、植林のための大きな穴をエンヤコラと掘る。昼食用の食料やチャイや、苗木などは、村人が植林現場まではるばる運んでくれましたが、これだって植林をする上で不可欠で、大変な労働です。それに、せっかく植えた苗木さえ、すべてが活着するわけではない。苗木の生長に合わせて、手入れも必要。これもまた大変な労働。それを承知で、植林をする。

森は、雨をよび、降った雨水を貯める自然のダムとなり、生態系を育む場となり、栄養分豊富な土壌を作り、ひいては私たち人間の生きる源となる。私は今回、ワークキャンプに参力するまで、このことを頭の上では理解していたつもりでしたが、この重要性について、真剣に考えることはありませんでした。

一度、人の手で壊された森林が、人の手でまた再生するには、いったいどれだけの労力と、時間と、知恵が必要なのでしょう。何よりも、人々の熱意、椿熱がなければこのような根気の要る計画は成り立ちません。

TEACAを始めとした村人の熱心さには、頭の下がる思いでした。彼らは、彼らの生活の時間も労力も経済面も、ある程度犠牲の上で、植林作業に加わる。それを考えれば、なおさらです。

ボレボレのワークキャンプは素敵ですね。

日本人である私たちが、あんな形で村人の歓迎を受け、交流したり植林作業に加わったりしたのは、長年かけて培った村人との信頼関係、相互理解があってこそ、だと思いますので、私はそんなワークキャンプに参加できたことを誇りに思い、感謝しています。

メンバーの方々、一人一人がみんな魅力的で、優しく、そんなみなさんとご一緒できたこと、幸せに思います。それぞれが、このワークキャンプから感じとった何かを活かしながら、これから更に素敵な人生を送れますように。

「私が知っているテマ村のこと」

自分は涙もろいです。

そのときも心の中で「あー、ほら来た、絶対だめだわ」って思っていました。

教会でのお別れ会が始まり、女の子たちが行進と手拍子に合わせて歌を歌ってくれました。その歌がどんな歌だったかはあまり憶えていませんが、それを聴いたときの心を揺さぶられた感覚は今でも憶えています。

全身に鳥肌を立て、涙目になっているであろう私は、周りに向かって照れ隠しの「やばいやばい」を連呼するのが精一杯でした。ハリウッドの超大作を高価なサウンドシステムで見ると、世界三大テノールの歌を生で聴くよりも、その歌を聴いた時の感覚は私の心に大きな何かを与えました。

ワークキャンプ中、私たちは村の中に身を置き、言うなれば村人たちの世界を覗かせてもらいました。私たちがワークキャンプ中に体験したことが、村の毎日の営みの全てだというのは言い過ぎかもしれませんが、「覗く」と言うには十分に値する、濃い肉容でした。

彼女たちが、どういった毎日を送り、どういったことを想い、周りの環境、人々、そして自分自身と、どうかかわって生きているか、ということ私たちが覗かせてもらうことができました。

彼女たちの歌がハリウッドや世界三大テノールを凌ぐ感動を私に与えてくれたのは、彼女たちの歌の技術がそれらに勝っていたからではもちろんありません(ごめんね!)。それは私と彼女たちが、お互いを知っているからです。

私は、彼女たちが小学校で勉強をする姿を知っています。

私は、彼女たちが遊んでいるときに見せる本当に楽しそうな笑顔を知っています。

私は、彼女たちが家の仕事を手伝い、水汲みに行くことを知っています。

私は、彼女たちが植林のときに昼食を持ってきてくれたりすることを知っています。

私は、彼女たちが写夏を撮ってくれと言って、「Picha! Picha」とせがむことを知っています。

私は、そんな彼女たちが私たちのために歌を練習してくれたことを想像できます。

私が知っている、そういった日々の生活の時間のなかで歌を練習してくれたことを、私は想像することができます。

小学校からの帰り道、あの山の道を家まで帰りながら、歌を口ずさんで帰っていった子もいるかもしれません。

夜、眠りに就く前に、心の中でその歌を繰り返していた子もいるかもしれません。

私が彼女たちのことを知っているのと同様に、彼女たちも私たちのことを知っています。歌を練習するときこ私たちのことを思い浮かべてくれたのでしょうか？

そうした彼女たちと私の小さな歴史は、私の涙腺を刺激するのに十分すぎるほどのパワーを持っていました。

そして、私が知っているのは彼女たちだけではなく、村の人々です。

私は、私たちが今いる日本という国から遠くに位置する、タンザニアのテマ村という所で、村の人々今日も生活をしていることを知っています。

私は、このワークキャンプで彼らについて多くのことを知ることができました。

そして、私は、何か彼らの役に立ちたい、と確かに思いました。

彼らというのは、もちろんテマ村の人々のことです。

同時に、彼らというのは、50年後、10年後、はたまた1000年後のテマ村の人々のことです。

あるいは、彼らはテマ村ではないところにいるかもしれません。

現在、テマ村のような状況に置かれている人々はこの世界に多く存在していると言われていました。

私は誇れるような技術も知識はありません。しかし、彼らのために何かをしてあげたい。どういった形でできるかはわかりませんが、そう思います。

さて、文章としてはここで終わりなのですが、最後にある歌を紹介したいと思います。

話をだいが戻しまして、お別れ会。きっと別れがたくて、ずっとそこにいたくて、という、ただただ悲しいものになってしまうのかと思っていました。もちろん、そういった感傷的な面もありました。しかし、お別れ会の始まりから山を下りる車の中まで、一貫して流れていたのは、後ろ向きな空気ではなく、柔らかな高揚感、と表現できるものであった、と私は思いました。

私はその雰囲気の中、ある歌を想いおこしました。「サヨナラCOLOR」という歌です。とてもいい歌ですので、ぜひ聞いてみてください。

日本に帰ってきた私達の中にも尚、あの時の高揚感が残り続けていてくれることを祈っています。